

“鳩・鶴”から“鳥”へ

元来、耳でとらえる“言葉”よりも、目でとらえる言葉(漢字)の方が、理解しやすく覚えやすいことは、すでに何回も言ってきた通りです。だから、「言葉を先に教えて、あとから漢字を教える」というのは、教え方が逆であり、誤っていると言うべきです。しかし、先にも述べましたように、現状では、まず“言葉”を、それから“漢字”を教えることにします。

“鳩、鶴、鶏……”こういう言葉を覚えたら、“鳩、鶴、鶏……”という漢字を教えましょう。言葉では、“はと”と“つる”とに共通するものはありません。鳩と鶏が同じ仲間であることは、言葉の上ではとても考え出すことが出来ません。

ところが、“鳩”“鶴”という漢字で書き表わしますと、“鳥 ” という共通部分があること

に気づき、“鳥”とは何だろうという疑問を持つようになります。疑問を持ち、質問するようになった時、初めて“鳥”という言葉进行を教えるのです。

親や教師というものは、子供が関心を示していないのに、とかく教えようとしたがります。しかし、「心ここにあらざれば聞けども聞こえず」で、

関心のないことは耳に止まりません。

子供は好奇心に富む動物です。ほっておけば、鳩と鶴から“鳥”を、蟻と蜂から“虫”を、鯉と鱒から“魚”を見つけ出すに決まっています。その時に、“鳥、虫、魚”という言葉进行を教えてやれば、必ずよく理解し覚えます。その時機をあせらずに持つということが、教育には必要なことです。

ところが、それが持てないで、何でも教えてしまう親や教師が多いのは、実に残念なことです。食欲のないのに、次から次と食べ物を口に押し込まれるようなもので、物を知る喜び(食欲を満たす喜び)を知ることが出来ませんから、真の向学心に燃える人間になることが出来ません。